
少女とゾンビと夢日記

緋羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女とゾンビと夢日記

【Nコード】

N1498Y

【作者名】

緋羽

【あらすじ】

少女とゾンビの夢を見た。僕はそれを日記に綴る。君に読んでもらいたくて。

病院…、いや、研究施設か。壁も天井も、そこかしこで忙しそうに歩き回っている職員らしき人々の制服さえも真っ白だ。

無機質な空間に生命体つまりヒトがいるのなら、本来であれば異常なモノとして浮かび上がるはずではないのか。それなのにどうだろう、肌の色さえ白く見えてくるほどのこの生気の無さは。これが普通であるのなら、僕は…。

歩みを止めて自分の身体を見下ろしてみると、何の事はない、他と同じくやはり白い制服に身を包み、露出した手の甲はなんとも不健康そうな白い色をしている。

一体なんの研究をしているのか、それすらも忘れてしまいそうなほどの忙しさの中でこんなくだらない思考を巡らせているだなんて、もしも周りの人間が知ったならどう思うだろうか。おそらく侮蔑を含んだ眼差しで見下され、鼻で笑われて終わり。あとはこれまでと同じように忙しく働くだけ。

駒なのだ。あいつもこいつもそして自分も、所詮は駒。騎士でも桂馬でもなく、言うなればオセロの白い方。何の価値もない、ただの使い捨て。そこに居ろと言われればいつまでも居るし、反転しろと言われれば馬鹿みたく素直に裏返る。

裏返ったところで裏面も白であり、黒くなんかならない。なぜなら白であることが研究者である証なのだから。この場合の黒とは…。

ただ立ち止まり意味もなくニヤリと笑う僕を見て、ヒソヒソ話しながら通り過ぎる女たち。若くもなく老いてもいない、実に中途半端な年代の女性が多くて困るよワトソン君。ワトソン君、…おや、ワトソン君はどこへ行った。なんてな、くくく…。

先ほど以上に意味のない妄想を繰り広げる思考回路を一瞥したつもりで制し、いつまで見下ろしていても面白くもなんともない自身の身体から視線を逸らした。

前を向き、息を吐き、力強く大股で歩く。使命感というほどでもないが、今やるべきことをするために、僕は僕であることを捨てねばならない。

君も知っているだろう、僕は天性の面倒臭がりだ。反抗する人間なんてヒトとして終わっていると思っている。反抗心とは虚構。ヒトであることを捨てた人間が妄想の果てに作り出した無駄な感情。ゆえに効率良く生命を営む無生物には持ち得ない熱源ともなり得る。つまり何が言いたいかと言うと、僕は熱意に燃えているということだ。この僕が人類史に残る偉業を成し遂げるだなんて信じられないだろう。…そうだな、実際成し遂げていないのだから信じるわけがないか。

きっかけは夢だった。どんな夢なのかをかいつまんで説明すると、ゾンビが世界を滅亡させる、などという当たり障りのない平和な夢であったわけなのだが、ここで一つ重要な要素が含まれていたことを付け加える必要がある。なんとこの夢、地団駄を踏むほど可憐な少女が僕を夢見た、という設定の夢なのだ。

少女は世界滅亡を予知し、それを知った僕が一人走り回る。そして世界を救う。「ありがとう、あなたは世界の、いえ、私の救世主です。好きです」。そしてキス、しかも彼女からの。

なんともご都合主義な世の中であるが、こんなご都合主義ならあえて受け入れようではないか。

夢から醒めた時、目の前には実際に彼女がいた。一人暮らしの僕の家にいるわけがない可憐な少女が涙を流して、目覚まし時計の上に座っていた。

今思うと、彼女は少し小さかった気がする。目覚まし時計の上に座れるくらいの小柄な人間なんて、世界中を探してもなかなか見つからないと思うが、君はどう思う。

僕はその大きさよりもとにかく可憐さにやられたよ。悔しいがそこは認めざるをえない。

少女は言った。

「助けて…」

世界を救うことに、その言葉と涙以外の理由なんて必要だと思いか。否、必要ない。

彼女は細かく、時に大まかに説明してくれた。要約すると、この研究施設にゾンビが現れる、その前に施設内のどこかにある対ゾンビ兵器を手に入れてやつらと対峙、そして殲滅せよ、というわけだ。

あまりにも乱暴なその任務に、思わず僕は笑っていた。断わるという意思表示を含んだ笑いだったのだが、それを見て彼女は満面の笑みを見せた。

「ありがとう」
と言いながら。

その顔を見て、僕の笑顔は意味を変えた。言うまでもなく、任せておけという意味を含んだ顔に変わったわけである。

そしてこの施設、表向きはVIP専用の高級病院。高級と病院の

二つの言葉がコラボレートするなんて、実際にこの場所で働いている僕でさえ信じ難いと感じている。そう、何を隠そう舞台は僕の職場その場所なのだ。

こんな偶然があるだろうか。偶然のはずがない、これはもはや必然なのである。その理由に表向きと述べたこと、つまりこの施設には裏の顔があることが関係している。

地上部分はちょっとお高めの病院であり、地下部分はなんと、国営のバイオプラズマ研究所となっている。それを知る職員はおよそ半分、もしくはさらにその半分程度ではないのか。僕には知らされていないが、自力でその事実をつかんでいる人間はおそらく僕一人だけであろう。

…と、個人的にはあるが今までずっとそう思っていた。これほど立派な建物には秘密の一つや二つはあるのが世の常なのだ。

その予想を確信に変えてくれたのが今朝の夢である。

夢と言うモノは、日頃から考えている事柄や心配しているそれが睡眠時にまで影響を及ぼすことで発生する事象であり、中には閉ざされた過去の記憶や隠された未来の予知を明かす媒体としても機能する場合がある。

今回のケースは、未来予知プラスαであるに違いない。あの小柄な少女の何らかの特殊能力が干渉しているのだろう。

地下へと続く唯一のエレベーターの前に到着した。1階ロビーから上に昇るためのエレベーターや階段ならそこかしこにあるのだが、地下へと降りるためのものはこれしかない。

患者は地下に用が無い。地下にあるのは職員用の研究施設、新種の菌や薬を培養したり精製したり、男女間の性機能と興奮時の血流濃度や心拍数の増加を新たな視点から云々…、というように、ラブホテル代わりとなっているのが実情らしい。

僕がそれを知ったのはつい最近だった。いつものように真っ白い作業着に身を包み、バケツとモップを持って男子トイレの清掃に精を出していた時のこと…。

ここでまた一つ、重大なお知らせがある。確かに僕はここの職員であるが、医者でも看護師でもなく、雇われのしがない清掃業者なのである。もちろん君は知っていると思うが。

あのナースのお注射が…とか、俺の自慢の聴診器で…などと、頭の悪そうな隠語を交えて話している若手医師たちの会話がたまたま耳に入ってきた。その時に地下の秘密を知ることとなったのだ。

エレベーターが開く。僕はそれに乗り込む。ガタガタと揺れながら扉が閉まる。レールに油が足りてないのだろうか、きちんと整備しておかないと何かあった時に危険ではないか。仕方ない、あとで油を差しに来ることにしよう。

階数のボタンを押そうとして、僕はハタと手を止めた。何階に行けば良いのかわからない。

扉に向かって右側、縦に二列並んだボタン。右の列は1から6、左の列は7から12、それぞれ4と9の数字が飛ばされている。

病院だからなのか…と一瞬思ったが、部屋の数字とはわけが違う。不吉な数だからという理由だけで階数表示を飛ばすとは考えにくい。

とりあえずB3のボタンを押した。もしかしたら、隠された階へと繋がる階段があるかもしれない。

緊張と不安、そしてわずかばかりの興奮を胸に抱き、僕は地下へと降りて行った。

静かに開くエレベーターの扉。どうやら閉まる時だけ滑りが悪いようだ。何かが引っかかっているのかもしれないが、それはさておきとりあえず先へと進む。

光源は、等しい間隔で整然と続く足元の青白い非常灯だけであったが、目が慣れるとそれさえも眩しく思えるようだった。

静かな廊下に響く自分の足音に聴覚はますます研ぎ澄まされ、同様に視野も広く鮮明になっていく。

普段は必要以上の電力を使うことのないよう制限されているのかもしれない。患者は来ないだろうし、客が来るとしても所詮まっとうな人物が訪問するとは思えないためだ。

肝試しのようになってきたが、目的を見失わないために改めて整理しておきたい。

僕がここへ来た目的は、可憐な少女を助ける夢から醒めた時にそこにいた小柄な少女に助けを求められたから。

可憐な少女と小柄な少女は同一人物であるというファンタジーな展開にテンションが上がったから。

その結果として、関節的にはあるが自分が今までひた隠しにしてきた妄想が真実であるとの裏打ちがとれたから。

そしてまず行うべきは、ゾンビが世界を滅亡させる前に対ゾンビ兵器を手に入れること。

果たしてどのような兵器なのか。複雑であったり大袈裟であったりすることはない気がする。

もっと単純な、例えばバタフライナイフのような接近戦用武器。これでゾンビの頭と胴体を切り離してしまえば良い。

ナイフを持っているつもりで目の前の空間を真横に切り裂いた。
：しかし、首を切り落とすためには刃の長さが少々足りないのではないか。ここはやはり日本刀、思い切ってなぎなた型の青龍刀もありだろう。

自分の剣技どうこうを考えるとなく、僕は僕が求める救世主像を作り上げていく。

想像上の青龍刀を鞘から引き抜き、絞り込むように両手で柄を握る。月明かりに照らされる刀身：、ここは地下なので非常灯に青白く照らされる刀身に後ずさるゾンビ。

追い打ちをかけるため、やや緩めてから角度を変えて握り直す。するとどうだろう、指の隙間から現れる荒々しい青龍の彫飾。やつらはそれを見て一目散に逃げ去って行くことだろう。

ふと我に返り、青龍刀ほどの大きさを振り回せる腕力がないことに気づく。僕にお似合いなのはせいぜい果物ナイフあたりか。だったら飛び道具はどうだろう。

リボルバー式コルト・シングルアクション・アーミー、通称ピースメーカーなら、回転摩擦を利用して火をつけてやることも可能である。

またはオートのグロック17。ストライカー方式ゆえの銃身の低さにしても大きく取られたグリップの角度にしても、発砲時の銃口の跳ね上がりを少なくするために上手く工夫された設計がなされている。ただし、その平坦なデザインは少々地味な気がしないでもない。

これもまた欠点がある。弾数が限られてしまうため、弾切れになった際のリスクがあまりにも大きすぎる。継続的な補給をできる状況であれば良いのだが、敵との交戦中にそれは難しいかもしれない。などとある意味皮算用しながら歩いていると、廊下の突き当たりに行き着いた。

建物の地上部分の中庭を囲った正方形の形をしているが、地下部分は一周できる構造にはなっていないらしい。

エレベーターから出て右手の壁沿いを伝って歩いてきた。途中一度直角に折れた気がする。

来た道に戻ってみるとやはり曲がり角が一カ所あり、L字の作りであることがわかった。

思っていたよりも長い廊下を慎重に戻り、再びエレベーターまで辿り着く。B4階へと続く階段を探していたため、一つ一つの部屋までは調べていない。途中わずかに開いたスライドドアがあったが、軽く見渡した限り、ベッドと幾らかの機材しかないありきたりな病室であるように見えた。

長い間使用されていないらしく、閑散とした様子が薄気味悪かった。

次は反対方向へ：と思った矢先、まだ見ていない向こうの方から微かな話し声と明かりが近づいてくることに気づいた。

慌ててボタンを押してエレベーターに飛び乗る。閉まる時のガタガタという音に気づかれるのではないかと冷や汗が流れ、心拍が早鐘を打ち鳴らす。

「何階だ？何階だ？」

思わず声に出していた。もちろん小声ではあったが、思いがけず自分の声に驚いて悲鳴をあげそうになった。

とにかく早く違う階で下りなければならぬ。エレベーターの階数ランプが動いていることを不審に思われたら大変だ。

瞬間的に色々考え、B2のボタンを押した。下方に押し付けられる感覚が気持ち悪かった。

あつという間に着いた階で扉が開き、すぐさま廊下へ出て陰に隠れる。階数ランプを数秒凝視したが、止まったままだ。

僕の存在に気づいているのかいないのかはわからないが、追いかけてくる様子は無かった。じつとりと染み出た額の汗を手の甲で拭く。

なぜB2階にしたか君ならわかると思うが、一応説明しておく。

今までいたのがB3階で、一通り調べ終わったら次はB8階に降りる予定だった。目指すのはB4階かB9階であるのだが、構造上あるとすれば登り階段よりも下り階段の方が可能性が高い。

そんな考えを巡らせている時に不慮の事態が生じた。やつらが来た。いわば未知との遭遇。

あの声と光の主が本当に逃げるべき相手であつたのかは、こうして落ち着いて考えてみるとやや疑問ではある。真面目に働く研究者だったのかもしれないし、もしかしたら一戦交え終わってホクホク顔で地上に戻る途中の男女だった可能性も捨てがたい。

どちらにしろ、パニックに陥っていた僕にはその場で判断することなどできなかった。

さて、そこでB3階を離れて最も早くエレベーターが止まるのはどこなのかと考えた時、上と下、どちらに行くかが重要になってく

る。

もしも僕の予想通り隠されたB4階が実在するとしたら、下に行くことはすなわち2階層分の距離であり余計な時間を喰うこととなる。

そうであれば必然的に、上に行くのが一番であるという結論に達する。消去法というやつだ。

心細くなってきた自分の気持ちだが、少しでも地上に近づきたくて反射的に上のボタンを押すように指を促したことも否めないが。

しかしこの判断が、後々大きな意味を持つてくることを僕はまだ知らなかった。

せっかくなのでこの階も調べてみることにした。

先ほどと同じ失敗を繰り返さないために、今度は一つ一つの部屋を順番に調べて行く。そうすればもし誰かと鉢合わせそうになったとしても、安全な部屋に隠れてやり過ごすことができるはずだ。

右手に向かって進む。一つ目の部屋のドアは運良く開いていた。暗い室内を覗き込んでみたがよくわからないので、意を決して、しかしそろりと足を踏み入れた。

中には誰もいなかった。詳しく探してみる。ベッドの脇に備え付けられていた懐中電灯は、ありがたいことに電池がまだ生きていた。そっとドアを閉めて室内を照らす。

特に変わったものは見つからず、テレビ台の下に置かれた金庫のフタが開いていることが少し気になったくらいだった。

他の部屋も調べてみたがやはりどこも同じであり、ただ一部屋、左の奥の病室だけは金庫が閉じていた。鍵がないので中身はわからない。

金庫自体の大きさは赤ん坊が一人まるまる入れるくらいのもので、なにと怖くなるような想像をわざわざしても仕方ないが、だいたいそのくらいの立方体だった。

ちなみに、開錠するためには鍵を差し込んでメモリを4つ合わせなければならぬ。メモリは1から99までの数字、それが横に4列。

1, 1, 1, 1から99, 99, 99, 99まで根気強く一つ一つ確認していけばわからないこともないだろうが、なんにせよまずは差し込む鍵が必要だ。

金庫はそのままにしておき、中央のエレベーターまで戻った。

もう一度B3階を調べてみたかったが、とりあえず今日のところはここで切り上げることにする。

*

仮想空間「デスペラード」。今プレイしているバーチャルネットワークゲームの名称だ。

デスペラードという冠を擁してはいるものの、文字通りのデスペラード：いわゆる無法者は、多くは居ない。全く居ないわけではないが、大多数の人間が干渉できるオンラインゲームという娯楽媒体である以上、中にはルールを守ろうとしない無法者がいるのは仕方のないことである。

それでも、この手の他のゲームと比べてみるとセキュリティはしっかりと管理されており、加えて、あらゆる世界観に対応できるようにプログラムされた自由度の高いシステムが、ここ数年で一気に評価されることとなった。

現実とそう変わらないゲームの中で現実とは違う事象が発生する。それこそ仮想現実が仮想現実となり得る所以である。

ある者は現実世界の情報をこと細かに入力し似て非なる日常を楽しんでおり、またある者はファンタジー色溢れる剣と魔法の大冒険に身を費やしていた。

僕はどちらかというと前者の楽しみ方をしていた。自分で言うのもなんだが、僕は毎日を一生懸命に生きている。清掃業務は楽な仕事ではないが、誰かがやらなければいけない大切な仕事ではないか。だったら自分がやろう、そう思って始めた。もちろんデスペレードの中の話である。

僕はいつも通り仕事に行き、いつも通り帰宅し、いつも通り眠る。すべてデスペレードの世界で。

そんなある日…。

少女とゾンビの夢を見た。僕はそれを日記に綴る。君に読んでもらいたくて。

6 (後書き)

第1章 仮想現実で少女と出会う

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1498y/>

少女とゾンビと夢日記

2011年11月14日00時37分発行